

「神の人モーセの祈り」（詩篇90篇）の意義

鎌野直人

I. 問題設定

詩篇は「祈祷書」としばしば理解される。確かに様式批評の観点から「嘆きの祈り（歌）」に分類される詩が詩篇には多く含まれている¹。ところが、「祈り」と一般的に訳される²を標題に含む詩はわずか五篇（17, 86, 90, 102, 142篇）にすぎず、それゆえに詩の標題としての「祈り」はある特定のジャンルを規定していないと考えられている³。

一方で、「祈り」を詩の標題にもつ五つの詩篇を様式批評の観点から検討する時、90篇が際立ってくる。まず、90篇以外の詩は「個人の嘆きの歌」のジャンルに分類されるが、90篇だけは「共同体の嘆きの歌」の特徴である一人称複数が数多く用いられている（1, 7—10, 12, 14—15, 17節）³。標題には「神

¹ 様式批評の観点から作られた詩篇の「嘆きの歌」のリストについては、B.W. アンダーソン「深き淵より：現代に語りかける詩篇」中村健三訳（新教出版社、1989）302頁を参照。

² Gerald H. Wilson, *Psalms*, vol. 1, The NIV Application Commentary, 59.

³ このジャンルの分類については、アンダーソン、74—82頁を参照。なお、90篇を「共同体の嘆きの歌」に分類することを躊躇する意見とそれに対する反論は Richard J. Clifford, "Psalm 9: Wisdom Meditation or Communal Lament?" in *The Book of Psalms: Composition and Reception*, edited by Peter W Flint and

の人モーセの祈り」（יְהֹוָה אֲשֶׁר־לֹא־לִפְנֵי תְּהִלָּתָה）とあり、個人の祈りを示唆しているが、詩の内容そのものは共同体、つまり「わたしたち」の祈りである。もちろん、各詩につけられている標題と様式批評の観点から見たジャンルとの不一致は他の詩にも見られる⁴。従って、標題とジャンルの不一致だけで90篇が詩篇の中で特別な位置を占めているとは言い切れない。しかし、この点以外にも90篇にはいくつかの特徴が存在する。詩篇の第四巻（90—106篇）の冒頭におかれている90篇は標題に「モーセ」が出現する唯一の詩である。そして、これに呼応するかのように第四巻にはモーセに関する叙述が集中している（詳細は後述）。つまり、モーセと詩篇との関わりを考えるならば、90篇は避けて通ることができない。

本論文では90篇の「神の人モーセの祈り」という標題に焦点を絞る。そして、この標題の持つ意義を考察したい。さらに、この考察をすすめる中で、詩篇全体の解釈に対する示唆ならびに新約聖書における「主の祈り」の位置づけに関して短く述べたい。

II. 神の人モーセ

90篇の標題は、モーセに「神の人（בָּנֵי־הָאֱלֹהִים）」という称号を与えている。「神の人」の表現は旧約聖書にたびたび表れ、モーセ以外にも預言者がこの称号で呼ばれている。たとえば、エリヤ（I列王17章、II列王1章）やエリシャ（II列王4—8章、13章）は「神の人」である。もちろんモーセも「神の人」と呼ばれているが、それはただ申命記33:1、ヨシua14:6、エズラ3:2、I歴代誌23:14、II歴代誌30:16、そして詩篇90篇の標題に過ぎない。

それでは「神の人」という称号はいったいどのような特徴をそれが冠せられる人に与えるのだろうか。モーセが「神の人」と呼ばれている箇所を中心に

Patrick D. Miller, VTSup 99 (Leiden: Brill, 2005) 190—205を参照。

⁴ たとえば60篇は「ダビデのミクタムの歌」（דָבִיד מִקְתָּם）の標題を持ち、個人の歌の色彩を示唆するが、詩そのものは「共同体の嘆きの歌」である。

考えてみたい。

まず、ヨシュア記14:6においてカレブはモーセを「神の人」と呼んでいる。そして「神の人」モーセがカレブに誓って語った言葉（14:9）を、カレブ自身は「主が・・神の人モーセに言わされたこと」（14:6）とも表現し、さらに「主がこの言葉をモーセに語られた」（14:10）とも叙述している。そして、モーセが誓ってカレブとその子孫に与えると約束した土地のことを「あの日に主が語られた山地」（14:12）とカレブは呼んでいる。ここで、モーセがカレブに誓った言葉はモーセ個人のことばであったのか、主がモーセに語った事をモーセが仲介したのか、ということを議論するのではない。この箇所から明らかなのは、カレブにとってモーセの言葉はイスラエルの一指導者のことばではなく、主のことばである、という点である。主のことばを仲介したか否かにかかわらず、「神の人」モーセを「みずからのことばを主のことばとして語る権威者」とカレブは理解している。同様に、預言者が「神の人」と呼ばれている箇所を見る時、「神の人」は主が語られたことばを民に仲介しているに過ぎない箇所も多くある（Iサムエル2:27、I列王12:22など）。しかし、「神の人」エリヤ（II列王1:10-12）や「神の人」エリシャ（II列王5:10; 7:2〔ただし7:1は異なる〕; 8:10; 13:19）の場合、彼らが発したことばは主のことばを仲介したか否かの記述なしに、主のことばとして受け止められている。さらに、無名の預言者が語った事を「主のことばとして呼ばわり告げた」言葉として理解されている（II列王23:16〔II列王13:2-3参照〕）。

これらの箇所において、「神の人」は預言者、つまり主のことばの仲介者に与えられた称号である。さらに、「神の人」の称号で呼ばれている預言者のことばは、預言者自身が自らのことばで語ったとしても「主のことば」と理解されている。つまり、「神の人」の称号で呼ばれている預言者たちのことばは主のことばと密接に結びついており、その結果、「預言者のことば」と「主のことば」を分離することはできない。なお、申命記33章において「神の人モーセ」（33:1）が祝福のことばをイスラエルに語っている。ここでモーセは仲介者として主がイスラエルの十二部族を祝福されるように祈るにとどまらず、彼らの将来を予告している（たとえば33:6, 10, 12, 17, 20, 22, 23, 25, 28など）。後者の場合、モーセはもはや主のことばの単なる仲介者ではない。主

のことばを自らのことばとして語っている「神の人」である。

このように「神の人」が預言者と密接に結びついている一方で、「神の人」の称号が神殿祭儀における規範と密接に結びついている箇所がある。まず、エルサレムにおける朝夕の燔祭に関する規定は「神の人モーセの律法」（תֹּורַת מֹשֶׁה אֲיָשָׁרְתָּאָלָה）に記されているとある（エズラ3:2）。さらに、ヒゼキヤの時代、エルサレムでささげられた燔祭は「神の人モーセの律法」に則っている（II歴代30:16）。また、I歴代誌23:14において聖なるものを聖別するアロンと対照されてモーセが「神の人モーセ」と呼ばれている。ここで「神の人」の称号は直接神殿祭儀と結びついていないようにも思える。しかし、I歴代誌23章及び24章が神殿での祭儀を担うレビ人の系図について記述している点を考えると、モーセの「神の人」という称号がここでも神殿祭儀と関わりがあることが類推されよう。

さらに、神殿祭儀との関わりの中で、「神の人」と呼ばれている人物はダビデがいる（ネヘミヤ12:24; II歴代8:14）。そして、「神の人ダビデの命令」（מְצָרְתָּה יְהוָה אֲיָשָׁרְתָּאָלָה）がエルサレムにおける礼拝（さんびやレビ人の職制）の規範として機能している。もちろん、「神の人」の称号のつかない「モーセの律法」（תֹּורַת מֹשֶׁה תֹּרְנָה）という表現もあり、この表現が用いられている箇所でも神殿祭儀とモーセの密接な関わりが示唆されている（ネヘミヤ8:1; II歴代23:18）。さらに、「神の人」の称号をもたないダビデと他に複数の人の「命令」（מְצָרְתָּה）が神殿での礼拝やさんびを規定している（II歴代29:25; 35:15）。しかし、エズラ記、ネヘミヤ記、歴代志において、「神の人」の称号が用いられているすべての用例が神殿祭儀の規範となる規定と密接に結びついている点は否めない。そして、その規範はモーセとダビデと深い関わりがある。なお、ここで述べてきた「神の人」の称号の用法は、先に述べた「預言者」とほぼ同義と考えられる「神の人」という称号とは一線を画す。「神の人」と呼ばれているモーセやダビデはこれらの箇所ではいわゆる預言者と考えることはできない。むしろ、神殿祭儀の規範を与え、その執行に欠かすことのできない特別な人物である。

「神の人」という表現に関する旧約聖書のいくつかの用例を見てきた。以上の検討から、モーセが「神の人」と呼ばれている場合、まず、「主のことばを

自らのことばとして語る人」、つまり「預言者」を指す場合が考えられる。次に、「イスラエルがエルサレムの神殿で礼拝する祭儀の規定とその執行において欠くことのできない人」を示唆する場合が考えられる。もちろん、どちらの場合も主とイスラエルの民の間に存在する特別な人物である点は変わらないが、前者には「神殿の祭儀」との関わりが全くないことを考えると、この分類は適切なものといえるだろう。

III. 詩篇におけるモーセ

詩篇そのものに目を転じ、そこでモーセがどのように描かれているかを考えてみよう。モーセは主の祭司として主のゆるしを乞い祈る者であり（詩篇99:6-8、アロンとサムエルと共に）、主からエジプトに遣わされた使者であり（105:26、アロンと共に）、神の激しい怒りから民を救うために主の前に立ったとりなし手である（106:23）。神に選ばれた（106:23参照）特別な存在ではあるが、すべてのイスラエルの指導者を超越した人物ではない。

「主の聖徒アロン」と列記され（106:16）、主がイスラエルを導く働きの仲介者としてアロンと併記されている（77:21〔日本語77:20〕）点からこのことが類推できよう。なお、モーセと民との一体性は詩篇においては顕著に現れている。モーセは民のためにわざわいを被り、約束の地に入ることができなくなった（106:32-33）。出エジプト記ではモーセのみに神の属性が明らかにされているが（出エジプト34:6-7）、詩篇においては「モーセのみならずイスラエルの民に知らされた」と歌われている（詩篇103:7-8）。以上のことから、モーセは神に選ばれ、特別な働きに携わってはいたが、アロンやイスラエルの民と同列におかれた存在として詩篇に描かれていると考えることができる。そして、イスラエルの民とモーセの一体性が強調されていることがわかる（103:7-8や106:32-33など）。

それでは、90篇に注目してみよう。用語において申命記のモーセの歌（32章及び33章）と詩篇90篇がいくつかの共通点をもつことは何人かの注解者によってすでに指摘されている（たとえばגַּבְעָה〔詩篇90:1および申命記33:27〕、נַּעֲשֵׂה〔詩篇90:16および申命記32:4; 33:11〕、תְּמִימָהやשְׁנִית〔詩篇90:17〕という特別な形

〔詩篇90:15および申命記32:7〕）⁵。また、詩篇90篇は出エジプト記32章から34章にかけて描かれているモーセの姿と数多くの共通点をもつ。神の怒りによって滅び失せる（動詞הָלַכְתִּיおよび名詞מִצְרָיִםの使用）と語っている点（詩篇90:7, 11と出エジプト32:10）、主に翻り（動詞שָׁבַע）、思い直す（動詞חִתֵּן）ように願っている点（詩篇90:13および出エジプト32:12）、そして神の契約に対する忠実さ（תָּהֲבָה）が言及されている点（詩篇90:14および出エジプト34:6-7）などである⁶。特に注目すべきなのは動詞שָׁבַעおよび動詞חִתֵּןのニッファル語幹を用いて、主にその憤りを止めるように懇願している点（詩篇90:13）である。David Noel Freedmanが指摘しているように、主にその憤りを止めるように進言し、成功裏に収めたのはモーセ（出エジプト32:12, 14）とアモス（アモス7:1-6）だけである⁷。従って、詩篇90篇の詩を「仲介者としてのモーセ」⁸の祈りとして理解することは自然である。モーセの登場なしに主の憤りをとどめることはできないからである。ここに詩篇106:23と90篇との共通点を見いだすことができよう。

これらの特徴を踏まえて詩篇90篇を「モーセの祈り」（またはMcCannのように「モーセならどのように祈るだろうかと想像して綴られた祈り」⁹）と考えた時、この祈りの祈り手、つまりモーセはどのような人格として90篇では描かれているだろうか。本篇が「共同体の嘆きの歌」のジャンルに分類されることから明白なように、詩人は個人の嘆きではなく、共同体の一員として共同体の嘆きを主に祈っている。共同体の不義を詩人は共有し（詩篇90:7-8）、それゆえ詩人自らも主の怒りのもとにあり（90:7, 9, 11）、その生涯は他の人々同様に短い（90:5-6, 9-12）。このようにして共同体と悲劇的な経験を共有する姿は、106:32-33に描かれているモーセと共通する。従って、90篇で「共同体の嘆きの歌」を歌っている詩人モーセは、McCannが述べている

⁵ Marvin E. Tate, *Psalms 51-100*, WBC 20 (Dallas: Word, 1990) 438.

⁶ J. Clinton McCann, "The Book of Psalms" in *The New Interpreter's Bible*, vol. 4 (Nashville: Abingdon, 1996) 1042-43.

⁷ David Noel Freedman, "Other Than Moses . . . Who Asks (or Tells) God to Repent?" *Bible Review* (Winter 1985) 59.

⁸ McCann, "The Book of Psalms," 1043.

ように「イスラエルの存在と人間の存在のパラダイム」¹⁰とまとめることができよう。イスラエルを代表している詩人は、主が翻って、いくくしみを示されるようにと懇願している。

五書との関わりを考慮しつつ詩篇90篇を見直す時、まさに「共同体の嘆きの歌」のジャンルにふさわしく、この詩篇に描かれている詩人モーセは共同体とその悲劇的運命を共有するひとりの人間である。その一方で、主に怒りを翻すように祈り、その祈りが聞かれうる特別な、神に選ばれた仲保者でもある。さらに、このモーセの姿は90篇独特のものではなく、詩篇全体に共通している。

IV. 「神の人モーセの祈り」の意義

なぜ共同体とその悲劇的運命を共有し、かつ神に選ばれた特別な仲保者（つまり、モーセ）の祈りである90篇が「神の人モーセの祈り」（הָלְלָתָה אֲלֹהִים מִצְרָיִם）と標題がつけられているのだろうか。なぜ単に「モーセの祈り」とせずに、「神の人」という称号をイスラエルのこの指導者に与えているのだろうか。モーセは詩篇に頻繁に登場するわけではない。その一方で、ダビデは詩篇の至る所（特に標題）に登場する。ところが、詩篇以外の箇所では「神の人」と呼ばれていたダビデも、詩篇では一度もそのように呼ばれてはない。たとえば、「ダビデの祈り」（דָבִיד הָלְלָתָה）の標題を持つ詩が詩篇には二つ存在する（17篇および86篇）。また、数多くの詩が「ダビデの（歌）」に相当する「ダビデ」を標題に持つ。しかし、ダビデは詩篇の標題において「神の人」とは一度も呼ばれてはいない。どのような理由で90篇の標題はあえてモーセを「神の人」と呼んでいるのだろうか。

90篇の標題における「神の人」のニュアンスとして、先に述べた「自らのことばを主のことばとして語る権威を主から頂いている預言者」を当てはめてみよう。つまり、90篇を「共同体から主への祈り」ではなく、「主からイス

ラエルへの語りかけ」として読むことができる¹¹。教会やシナゴーグに与えられた正典として詩篇を読む場合がまさにこの状況にあてはまる。つまり、90篇という人から神の嘆きの祈りを「主のことば」として読む必要性を「神の人」の称号の持つニュアンスは示している。

他方で「神の人」のニュアンスとして神殿での祭儀の規範との関わりを考えた場合、この標題の持つ特異性の別の側面が浮かび上がってくる。すでに述べたように、「神の人モーセの律法」（תֹּרְוָתָה אֲלֹהִים מִצְרָיִם）は、モーセを仲介者とする主との契約に則った、イスラエルの民のエルサレム神殿における祭儀の標準を与えていた。この表現と90篇の標題は並行すると考えることができる。つまり、「神の人モーセの祈り」（הָלְלָתָה אֲלֹהִים מִצְרָיִם）は、モーセを仲介とする主との契約に則った、イスラエルの民のエルサレム神殿における祈りの規範として90篇を理解すべき事を示唆している。つまり、自らの不義を認め、自らの減びゆくべきことを受け入れ、主のいくくしみの発露を求め、主がその怒りを翻らせるように求めることは、単なるモーセ個人の主への願いではない。また、イスラエル共同体の内的必要から生まれてきた要求に限定してはならない。祈りの対象である主が、契約の民であるイスラエルに神殿において共に祈るよう求めた祈りの規範という側面を忘れてはならない。つまりモーセによるとりなしの祈りであると同時に、共同体が共に祈るようと主がモーセを通して与えられた規範となる祈りとを考えることができる。もちろん、「神の人モーセの律法」と「神の人モーセの祈り」の違いはある。前者は合成形の鎖による構文であるため、特定されたひとつの「律法」を指し示している。事実、「神の人モーセの律法」の詳細な定義には議論があるが、五書などに代表される律法全体を指していると考えてさしつかえない。ある特定の一つの律法である。しかし、「神の人モーセの祈り」は前置詞「を」を用いた構文であるため、複数の存在が仮定される「祈り」のうちの不特定の「ひとつの祈り」を表している。つまり、エルサレムの神殿において祈るべき規範の祈りは数多く存在し、90篇はそのうちのひとつに過ぎない。

¹¹ Brevard S. Childs による正典的アプローチは詩篇をこのように理解している（*Introduction to the Old Testament as Scripture* [Philadelphia : Fortress, 1979]）。

⁹ Ibid., 1041.

¹⁰ Ibid.

ただし、このことは90篇のエルサレム神殿における規範性を否定するわけではない。

これまでの議論をまとめておこう。その標題と内容の五書との関わりから「モーセが共同体の一員として祈った祈り」として90篇は理解されてきた。しかし、「神の人モーセの祈り」という標題における「神の人」のニュアンスを重要視した場合、この詩は「モーセが共同体の一員として共同体と共に祈っている祈り」でありながら、それを超越し、イスラエル共同体が契約の民として神殿において祈るべき規範的祈りになっていると理解すべきである。モーセの代表祈祷は民の共同祈祷の規範となったのであり、モーセの代表祈祷であるからこそ民の共同祈祷の規範となりえたのでもある。従って、イスラエルの民は、モーセと共に主との契約に則って90篇を祈るようにまねかれている。

それではなぜ神から契約に基づいてイスラエルに与えられ、共同体が神殿において共に祈るべき規範的な祈りが詩篇の第四巻の冒頭に置かれているのであろうか。このことは近年盛んになっている詩篇の編集に関する研究の成果を援用すると明確になってくる。

Gerald H. Wilsonは王の詩篇に分類される詩篇2篇（第一巻の初め）、72篇（第二巻の終わり）、89篇（第三巻の終わり）が詩篇最初の三巻の継ぎ目に置かれている意図を探求し、2篇から89篇（つまり1篇を除いた最初の三巻）までがダビデ王家の消滅に対する捕囚期の応答として編集されたと主張している。そして、ダビデ王家を拒絶された神に対して、もう一度ダビデに誓われた約束を思い起こし、この約束を果たして下さいと第三巻の終わりで訴えている（89：46-51）と理解した。さらに、1篇ならびに90篇から150篇（第四巻ならびに第五巻）は捕囚期後に付け加えられたものであって、王制期以前のイスラエルの信仰を想起させ（90篇、105-106篇）、もろい人間の王族に信頼するのではなく、王である主（93篇、95-99篇）に依り頼む（145-146篇）ことを勧めたと彼はまとめている¹²。あえて単純化するならば、第一巻から

第三巻を通して、イスラエルの現在置かれている問題点（捕囚）が提案され、第四巻から第五巻にかけてその問題に対する解決（王なる主）が提示されているのだ。さらに、1篇は詩篇の最終形態において全体の導入である。そして、1：2の「主の教え」（הָרָאָתְךָ תֹּהֶן）は五書に代表される律法を指すだけではなく、最終形態の詩篇そのものを指すと考えられている¹³。つまり、詩篇は古代イスラエル神殿における礼拝で用いられた贊美や祈りが集められたものである一方で、まさに主からの教え（instruction）であり、主を知るための教科書である。なお、詩篇を主からの教えとしてとらえる考え方は決して近年生まれてきたものではない。McCannはカルヴァンの詩篇注解を引用し、「詩篇が正しく祈る真実の方法を教え」、さらに「神をほめたたえる正しい態度を詩篇より完璧に教える書はない」とも言っている¹⁴。

さて、これらの研究の文脈の中で本論文の結論を考えてみよう。捕囚というイスラエルを襲った危機的状況に対する解決が提示される第四巻の冒頭に、90篇が「神の人モーセ」の祈りとして置かれている。そのことによって、標題ならびに詩そのものが第四巻において述べられるであろう解決の二つのポイントを予期的に提示していると考えることができる。まず、標題によって、本詩はモーセ個人のことばでありつつも、それを超越し、主から契約の民へのことばであると示唆される。つまり、イスラエルの問題の解決は人間がみずから之力で発見するのではなく、王である主から与えられるものであることが示

Psalms : Composition and Reception, edited by Peter W. Flint and Patrick D. Miller, VTSup 99 (Leiden: Brill, 2005) 391-93に簡単にまとめられている。なお、詳細は以下の論文を参照せよ。Gerald H. Wilson, *The Editing of the Hebrew Psalter*, SBLDS 76 (Chico, CA : Scholars Press, 1985); "The Use of Royal Psalms at the 'Seams' of the Hebrew Psalter," JSOT 35 (1986) 85-94; "The Shape of the Book of Psalms," *Interpretation* 46 (1992) 129-42; "Shaping the Psalter : A Consideration of Editorial Linkage in the Book of Psalms," in *The Shape and Shaping of the Psalter*, edited by J. Clinton McCann, JSOTSup 159 (Sheffield : JSOT Press, 1993) 72-82.

¹³ たとえば、J. Clinton McCann, *A Theological Introduction to the Book of Psalms : The Psalms as Torah* (Nashville : Abingdon, 1993) 18を参照。

1979] 513)。

¹² 彼の主張はGerald H. Wilson, "King, Messiah, and the Reign of God : Revisiting the Royal Psalms and the Shape of the Psalter," in *The Book of*

されている。しかし、そこにモーセという律法と切り離すことのできない、特別な人物がいることを忘れてはならない。次に、主から与えられた解決の方法は、モーセによって与えられた主との契約に則って、規範的な祈りである90篇を共同体が神殿で祈り続けることであると「神の人モーセの祈り」という標題は示唆する。つまり、問題の解決のために必要なのは、まずエルサレムの神殿において、そこで礼拝されている主に共同体が声を上げ続けることである。もなく崩れ去るであろう人間の王に頼っても、解決は得られない。契約の民に与えられた模範的な祈りを祈り続ける、つまり主に頼り続けることによってはじめて解決への糸口が見いだされる。そして、神殿で礼拝を続ける事こそ、主がイスラエルの民に詩篇を通して与えられる指針（instruction）のひとつである。

最後に、新約聖書における祈りとの関わりを考えておこう。「主から教えられる規範的な祈り」という範疇に主の祈り（マタイ6:9-15；ルカ11:2-4）が挙げられる。この祈りは詩編90篇を模倣したものではないが、主の祈りと「神の人モーセの祈り」はいくつかの点で共通点が挙げられる。まず、どちらも神の直接的介入を求めている。主の祈りでは「神の国の到来」を求める点において、この特徴を見いだす事ができよう¹⁴。次に、契約の仲保者（詩篇の場合はモーセ、主の祈りの場合はイエス）が模範的な祈りを民に取り次いでいる点も忘れてはならない。神と民とを結びつける存在なしではこれらの模範的祈りはありえない。単なる祈りではなく、「モーセの祈り」であり、「主（イエス）の祈り」である。さらに、ルカ9:28-36において、「神の人」であるモーセとエリヤと共にイエスがおられる点は興味深い。明記されてはいないが、イエスも「神の人」のひとりとして認識されていると考えることができる。最後に、二つとも個人の祈りではなく、「わたしたち」の祈り、つまり共同体が主に求めている祈りである。契約の民が共に祈る事の重要性をこの特徴はわたしたちに思い起こさせるのではないだろうか。

（日本イエス・キリスト教団名谷教会牧師）

¹⁴ McCann, *A Theological Introduction*, 20.

¹⁵ N. T. Wright, *Jesus and the Victory of God* (Minneapolis : Fortress, 1996) 293.